

熱入る稽古

未来へ神楽を伝えたい

薄根太々神楽保存会と薄根太々神楽硯田保存会は、それぞれ約15人が所属し、平均年齢は60歳前後。元は1つの団体でしたが、奉納する神社や練習拠点が異なることから、現在は別々に活動しています。お互いの良さを生かした伝承に努め、平成5年の式年遷宮時には、合同で伊勢神宮へ奉納しました。

両会とも、稽古は公演1カ月前の夜間に行っています。踊りや演奏は技を見て覚えたり、直接教わったりしながら受け継がれてきました。それぞれの役に独特な動きがあり、一度途絶えると正しく伝えられなくなるといいます。

地元の子どもの交流にも力を入れ、コロナ前までの毎年2月には、薄根小学校3年生を対象に体験学習会を行ってきました。児童は神楽の歴史や物語を聞いてから、鈴の



太陽が後光のように差す菅原神社境内の神楽殿



▶天狐之舞の稽古で、林孝俊さん(中央)が動きやバランスなどを指導。キツネ役は三浦温子さん(左)、武井恵美子さん(右)



音に合わせて軽快に踊ったり、太鼓を叩いたりします。薄根太々神楽保存会の林孝俊さんは「子どもがいるとにぎやかに」と話し、薄根太々神楽硯田保存会の片野日出夫さんは「子どもも神楽ができるようになれば」と期待します。

薄根太々神楽硯田保存会は、子どもや見る人が理解しやすいようにイラストを使って神楽を説明したガイド「面白いほどよく分かる薄根の太々神楽」を作製。次世代への継承に生かそうと、ヌマタ・アート・アンバサダーで篠笛・能管奏者の富澤優夏さんに笛の楽譜の制作も依頼しています。



参》

赤い羽織を通す



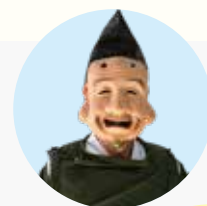
式》

タコの胴体の赤い袴をはく



巻》

白装束をまとってから



たこ入道ができるまで

